妙の光（たえのひかり）

通刊50号 **復刊29号**
2000年3月10日（季刊）
角田山妙光寺 発行
新潟県西蒲原郡巻町
角田浜 〒953-0011
TEL 0256-77-2025

海棠（カイドウ）

春の訪れはことのほか嬉しい。やわらかい日差しにふく風が心地よく、ウグイスが鳴き花が次々と咲き誇る。そんな境内で清楚な感じの梅や桜と一味違う、ひときわあでやかなのがこの海棠の花だ。

苗木を植えたのでまだ木は小振りだが、形は桜に似た紅色の花を一杯につける姿は見事。駐車場から川を渡り客殿に向かう参道の両側に十本余りあって、見頃は四月中旬の五日間ほど。

徳川時代初期に中国から渡来したもので「睡れる花（ねむれるはな）」という異名があり、楊貴妃の故事に由来すると本にある。古来、雨に濡れたさまが女性の艶っぽい姿にたとえられる、という説明もうなずける気がする。

海棠に乙女の朝の素顔立つ　　赤尾兜子
海棠の日蔭育ちも赤きかな　　一茶

涙はまごころのあらわれ

小川英爾

「いやー、涙も出ないかと思っていましたがやっぱり泣けるもんですね」。先日巻町のKさんが、八十七歳の母親の葬儀を終えて私に話した言葉だった。というのもKさんの母は六十六歳のときにくも膜下出血で倒れて以来、亡くなるまでの二十年間意識がなかったのだ。正確には二十年と十カ月、食事もチューブで胃に送るいわゆる植物状態のままだった。その年月の長さはいま二十二歳で大学三年生の息子が、「僕お祖母ちゃんの元気な姿は記憶にありません」と言うほどだ。

Kさん夫婦はこの六年間に三人の家族を失っている。もともと妙光寺の檀家ではなかった。この母親の実家が檀家のせいで親戚に檀家が多く、Kさんの「あちこちの法事や葬式に出たけど妙光寺さんのが一番ありがたい感じがしました。遠からずくる両親の葬式をお願いしたいので」と申し出られてご縁ができた。

ところがやってきたのは両親の葬式ではなく、十八歳の元気な娘の葬式だった。交通事故による突然の死。文字通り青天のへきれき、人間は本当に先のことはわからないものである。周囲の誰もがそう実感したことであろう。なによりもKさん夫妻にとって一男一女の可愛い娘、その嘆き悲しみは察するに余りあるものがある。取り乱したところを見せることもなく気丈に振舞うふたりの姿を見るにつけ、心中を思わずにはいられなかった。

じつは例え外面的にせよ、取り乱していられない事情があった。長年植物状態の母親、さらに父親

も老人性痴呆症でその介護が大変だったのだ。やはり老人性痴呆症だった私の母が、亡くなる前の年だったか年の瀬の二十五日過ぎに、肺炎で町立病院に入院したことがある。手のかかる患者だからナースステーションすぐ隣の六人部屋だった。その夜私は点滴の針をはずそうとする母の手をつかまえて一晩を明かしたのだったが、偶然にも斜め向かいのベッドに付き添うKさんの奥さんを見つけた。義父が喘息の発作で入院したのだが、痴呆で目が離せないという。年末で家のことも気がかりだというので、私でよければ朝まで看てますよ、ということになった。

深夜、賑やかだった向かいのベッドの騒ぎも納まったころ、今度はKさんの父の大きな声が聞こえてきた。川で鯉か鮒を釣る夢を見ているらしい。そのうち友達に誘われて川に出かけようとなり、実際にベッドから降りて歩き出そうとしている。私があわてて駆け寄り「まだ暗いからもう少し明るくなってからにしよう」と声をかけながら体を制した。すると「おうそうだな、そうするか」と素直に従って、ベッドに戻りじきに寝息が聞こえてきたのだった。このときKさん夫婦の大変な状況を実感したことを覚えている。

その父を三年前に送り、今回の母の葬儀だった。何回目かの危篤を迎えたのち、静かに息を引き取った。正直なところ周囲も家族もホッとした、そんな思いがあって当然かも知れない。でもやっぱり……、それが冒頭のKさんの言葉なのだと思う。そんなKさんに、私が父のように慕い尊敬してやまない、先頃引退された身延山久遠寺の岩間日勇前法主の著書『共に生き　共に栄える』から一遍の詩を贈りたい。

『涙はまごころのあらわれ』

生者必滅　会者定離　／　人として死せざる者　一人もなし　／この理（ことわり）を知りながら
愛別離苦に泣く　／この凡情の哀れさを　君、咥（わら）うことなかれ　／　泣いた涙で　無常をさとり　／　死をみつめて　生の貴さを知るからだ　／　泣くことは迷いでなく　涙はまごころのあらわれでもある

信心

毎日一時間のお勤め

新潟市　高橋吉重さん（77歳）

高橋さんは毎日夕方、仏前で一時間あまりの読経を欠かさない。十五歳から定年までの四十年間働いた北越製紙を辞めてから八年、ずっと続く日課だ。身延山にお参りしたとき求めた活字の大きいお経本が、すっかりボロボロになってセロテープで補強してある。

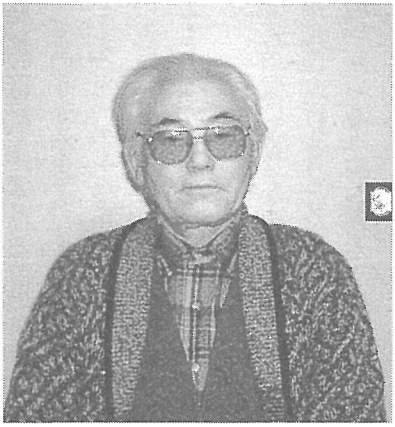
このとき一緒に求めたテープを聞いて、以前曽祖母に教えられたお経を思いだし、さらに独習でかなりのお経が読めるようにもなった。「苦労して育ててくれた曽祖母と祖母が喜んでくれたら、そんな思いがきっかけでした」という。

母親が実家で婿をとってから分家に出たから高橋さんは二代目。その実家で高橋さんは生まれた。すぐに弟が生まれ、同じころに祖母も出産したので高橋さんの幼い頃は曽祖母に育てられた。この曽祖母が苦労した人だった。その夫は坂口安吾と机を並べて勉強したという秀才で、三十一、二歳で村長を努めるほどだった。しかし三十代後半で病死、家の後を継いだ娘が高橋さんの祖母にあたる。

「曽祖母が亡くなったときその太ももに、線香によるやけど跡が何本もあったんです。私と父、それに母の兄弟と六人が戦争で兵隊に取られ、自分の体を痛めてその無事を祈ったと聞きました。だからでしょうか、皆戦死することなく戻りました。他にも苦労する姿をたくさん見てきました。十代のころも曽祖母のいる実家にしょっちゅう行き、夕方になると家族全員で仏壇の前に揃い、曽祖母のお経を聞かされたのが、ずっと耳に残っているんです」。

戦争では隣の船が撃沈され、自分は助かったものの終戦でシベリアに二年余り抑留された。「抑留の後半は病気で収容所暮らしでしたが、薬も食料もなく毎日四、五人が死んでいくんです。地獄を見た思いです。そんなとき思い出した曽祖母の姿が生きる支えでした。その恩返しのつもりです」。

元気に定年後の暮らしを過ごしながら、先立たれた奥さんや、両親、叔父叔母の菩提を弔う毎日でもある。



寺の動き

本堂工事の業者決定

二月二十六日に臨時総代世話人会議を開いて、本堂工事を発注する建設会社を左記のように決定しました。

㈱加賀田組に一億四千三百万円

新潟市に本社を置く、県内大手のひとつです。

多数の受注申込があった中から九社に、詳細な見積り金額と工事計画書の提出を依頼しました。その中から七名の工事委員が第一次選考として四社に絞り、第二次選考として臨時総代世話人会議の席上満場一致で決定したものです。選考方法は社名を伏せて、見積り内容、工事計画を一覧表にして比較検討しました。

決定した加賀田組は金額が安いうえに、見積りの細部も問題なく適切であったこと。豊富な文化財建造物の修復経験から、祖師堂に再利用する現本堂の内陣部分を、〝解体復元〟する工法を提案したことが評価できました。他の会社はすべて〝引き屋〟といって解体しない工法でした。また工事計画書が具体的、寺社専門の担当者があたる、などの点も評価されました。建設業界はどこも厳しい経営環境にありますが、加賀田組が特に悪い状況にあるとは言えないとの銀行からの情報も確認しました。

今後三月早々に契約し、工事の工程と行事の関連を煮詰めて再度ご報告します。

建て替えを控えた本堂ですが、老朽化した屋根のカラー鉄板が冬の強い風で広範囲にわたってめくれてしまいました。応急処置をしましたが激しい雨漏りが防ぎ切れません。ご承知おきください。

本堂工事のため秋の団体参拝旅行は休止します。また三年前の中国団体旅行に参加された方たちから再度の要望があります。来年六月にシルクロード西安、敦煌を計画します。

妙光寺史話

日寿上人著

「臨時得意・年中行事」（五）

追加

一．下男給分

春秋各六〆五百文、あるいは七〆文半季分也。このほか夏は小着物代として別に五百分遣す。盆前に飯行李と共に笠代百文、扇子代廿五文ずつ遣す。暮にはビン付油半本、元結二把ずつ遣す也。

一．年中入用の薪木

二棚、是は五ヶ浜へ頼む。炭八俵、是は佐渡より調い来る。新潟より求めることもあり、汰上の与右衛の頼候事もある。

一．村内よりの作徳米

上年には九俵五斗三升入、中八俵　下六俵半或は七俵。十月御会式前後に来る。徳兵衛世話人也。此のほか年中村方年貢出銀等悉く徳兵衛一人の世話也。盆正月収納有之候節は銭十〆文程ずつハ兼て預け置候。

事然るべく存候故、年前に預け来りし也。勿論山中の離れ寺、物を沢山二貯え置くことは大不用心也。徳兵衛、惣助両家へ預け置候得ば、随分丈夫也。

一．檀那中、婚礼または家作り等有之候節八桐箱一、玉素麺二三、或は家柄により有合せの風呂敷等祝儀に遣すべき也。

一．処々役人中、寺方或は檀中等死亡の節は廿匁掛ケロウソク三挺五挺よきように。

奉指上一札之事　京住院

一．月六斎日、本堂出仕、懈怠無く相勤めるべきこと

一．法用簾略致間敷事

一．万事御山主之御下知に随うべきこと

右の條々堅く相守り真実に山務に仕りべく候。後日のための一札、仍而件の如し。

右旧記等の類も無之候。時々是好（弟子）と相談の上、時宜に準じて取計い来り候分、荒々（概略）相記し後主之草案に擬するもの也。

御勘考の上、後来のため新に帳面を仕立て、御記録有之候ハバ万代不易たるべし。余老衰病弱、その義を遺すこと能わず。恨みて漫（ソゾロ）也。

冀（コイネガワ）クバ愍念（ビンネン）の有べしと言えり。

事成　　日寿
享和二年桐壬戌十一月十七日　記之
（一八〇二年）

（終）

「終りにあたって」

日寿上人が妙光寺にあって、三年の月日をかけて『祖書綱要刪略』七巻を著述され、脱稿したのが寛政十三年春（一八〇一）だった。六十一歳だった。

その後、後任住職が寺院運営に困らないようにと著わしたのがこの『臨時得意・年中行事』である。

著述されてある内容は、年中行事・お札の作り方・祝儀・村々への巡回・下男の給分・薪炭等多岐にわたる。

すべて日寿上人が十年間の住職としての体験から、このことがわかったら便利だとお考えになったことを記述されたものであろう。

表紙の左下の角がすれて薄くなっているのは、後の御住職が常々活用した話しであろう。

この冊子が著されてから約二百年の月日が流れた。ここに記された行事や留意点はその時代々々に合うように少しずつ変化しているようだ。しかし、根底にある日蓮宗の教えは不易のものとして脈々として流れているのであろう。

本冊子が書かれたのは一八〇二年、現在の本堂の棟上げ（一七六四年）から三十七年目にあたる。今の本堂もまだ真新しい頃だったにちがいない。

本堂のどこかに日寿上人の残された跡があるかもしれない。

平成十二年、本堂建て替え工事が始まる。再利用できるものは祖師堂として使用されるとのことである。

新しい時代にマッチした本堂が近い将来に完成する。

新しい時代、新しい本堂にふさわしい「臨時得意・年中行事」の内容はどんなものになるのであろうか。

妙光寺に縁のある方々が知恵を出しあって、二十一世紀にふさわしいものを創り出していくにちがいない。

（石田誠太郎）

関東地区の集い

ミニフェスティバル

高齢で八月の集まりに新潟まで行きにくい、近くで他の方と交流したい、との声に応えて、関東地区在住者を対象にした二回目の「ミニフェスティバル安穏」を計画しました。今回は交通の便のいい都心のお寺が会場です。

どなたでもかまいません。親族や友人を誘ってお出かけください。まだ会員でない方もどうぞ。共に考えたり話し合ったり、和やかな集まりにしたいと思います。

・日時と集合場所

四月二日（日）十二時半から一時までの間にJR山手線、京浜東北線の田町駅西口（三田方面）改札口に集合。係が案内してタクシー相乗りで会場まで五分です。午後一時十分開会。

・会　場

長久寺　港区三田一―十一―三十一

電話　〇三―三四五一―三四五九

慶応大学近くの閑静な住宅街の一角、ご住職は小川住職の友人で、改装したばかりのこじんまりしたお寺です。

・内　容

「人生の店じまいを考える」と題して、人が亡くなったときに起こるさまざまな問題を具体的に考えます。病院との問題、葬儀、ガス水道電気の契約解除、年金、財産保全等々問題はたくさんあります。これを請け負う法人も先ごろできました。専門家の黒沢淑子さんのお話と碑文谷創さんの助言、小川住職も加わります。

後半に軽い飲物で交流会をして、遅くとも午後五時前には解散の予定。

・参加費　一人三千円（当日）

・申し込み

三月二十五日までに電話でも結構ですが、なるべくはがきかFAXで妙光寺へお知らせください。

他のお知らせ

八月のフェスティバルは本堂工事の都合で、規模を縮小して二十七日（日）を予定しています。

安穏廟四基目は七月末完成予定で、三十件余りの予約申し込みがあります。

寺庭から

二足のサンダルはいてみた

小川　なぎさ

毎年冬は暇なので、寺にこもってグータラ過ごしていたのですが、今年は近くの保育園に二月と三月の二か月だけ、産休の保母さんの変わりに働きにいっています。結婚して保母をやめて以来、十六年ぶりの仕事に不安はありました。けれどもこのお話しをいただいた時、わくわくする気持ちが不安に勝りました。

総代さんからも、「いいんじゃないですか。たまには奥さんも外の空気を味わってみるのも」と、とてもうれしいお言葉を頂き、住職も理解してくれたので、気持ちよく働きにでています。

毎日仕事にでかけるという生活は結婚以来初めてだったので、家事のやりくりがたいへんでした。でも、慣れたのと、実家の両親や家族全員の助けで、どうにかこの生活もつつがなく終わろうとしています。

今までずっと妙光寺に暮らし、自分なりに一生懸命やってきたつもりだし、やり甲斐もありました。しかし、自分自身のことを思うとき、まだ何かできるのじゃないかという、かすかな希望はまったくなかったわけではないので、今度の出来事は本当によい経験になりました。

お寺での暮らしは、寝ている時以外、勤務しているような張り詰めた生活です。いま保育園に行っている間は、全てのことをみんな忘れ、可愛らしい子供たちと楽しく過ごしてくると、体は疲れていても、精神的にはリラックス出来ました。

初めはそのことがとてもうれしかったのですが、今度は不規則だけれどいつなにが起こるかわからないお寺の仕事も懐かしくなってきたのです。

いやはや、わがままなものです。出来るだけ正直に、自分の心にこの出来事を問うでみると、仕事そのものはどちらも好き。けれども、どちらもやるというのは無理だな、と思いました。

自分に与えられた仕事を精一杯する、「置かれた場所で咲きましょう」という娘たちが通う中学の理事長先生の言葉をしみじみとかみしめた、この冬でした。

行事案内

春のお彼岸中日法要

三月二十日
午前十時半　安穏廟法要
　十一時　彼岸会中日法要
　十二時　おとき
午後　一時　説　経

いよいよこの本堂での行事が四月の「ご判様」とであと二回になりました。ご判様は大勢の参詣者で混雑しますので、心静かに過ごせる最後の行事です。記念写真を撮る予定ですのでぜひお参りください。

安穏会員の方もどなたでも、お昼のお斎（とき）に着いていただけます。当日広間に受付帳場がありますので、そこでお申し込みください。

ご判様お開帳大会（だいえ）

四月二十九日（みどりの日）
午前八時半　受付開始
　九時　説　経
　十時　奉迎行列（岩屋発）
　十時半　山門法要、おねり
　（稚児、音楽出仕）
　十時四十分　音楽大法要
　十一時五十分　説経、お開帳
午後一時半　施餓鬼法要
　二時半　祖師堂お開帳
　三時　終了

事前に志納金袋と祈願、施餓鬼法要の塔婆申し込み書を配布します。祈願は午前の大法要で、塔婆は午後の施餓鬼法要でそれぞれ読み上げになります。お申し込みください。

今年の年番は曽根、升潟組、また角田地区の方には幟立てと輿かつぎを、それぞれよろしくお願いします。

稚児募集のお知らせ

四月二十九日のご判様に出る稚児を募集します。年齢は三歳くらいから小学校一年生くらいまで。男女あわせて十名。檀家に限りません。外孫でもどなたでも結構です。衣裳は白足袋だけお持ちください。費用は三千円当日に。九時集合で昼食食べて解散。申し込みは寺か各地区世話人まで。

あとがき

いよいよ本堂工事の着工が目前です。工事業者の選考には公正にいい会社が選べるよう、本当に神経を使いました。

工事は業者がするので決まれば安心、と気楽に考えていました。ところがこれから着工までの段取り、仏具移転の準備、納屋の掃除、そして工事期間中の行事の方法等々仕事が山積です。それ以外にも通常の作業はいつも通りですから、春が来て忙しくなることを思うとゾッとします。なにぶんにもご協力お願いします。

毎日新聞連載の「寺おこし心おこし」は、一・五倍に分量を増やして六月に大東出版から本になります。書名は『変わる墓変わらない心』を考えています。こちらもよろしくお願いします。（小川）